
押入れ少女はラノベの世界に憧れている(仮)

=Bad.jp

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

押入れ少女はラノベの世界に憧れている（仮）

【Nコード】

N4215BA

【作者名】

||Bad.jpg

【あらすじ】

ある男性と少女の本屋で働く物語。

プロローグ

「ただいまー」

玄関を開け6畳とキッチン、トイレとお風呂といった一般的に充実した家に帰り着く。その声に反応して奥のほうから幼い声が返ってきた。

「おかえりー」

奥のほうからといってもさほど大きくない声ではあったが耳を澄ませれば聞き取れる範囲の音。男性は買物袋をキッチンへと運び6畳の部屋へと入るが先ほど聞こえてきた幼い声の主はそこにはいなかった。

部屋の蛍光灯に電気を入れ明るくすると同時に何処かで天井に何かをぶつけるような音がした、しかもかなり鈍い音。男性は押入れのほうを向き一言それに呟く。

「大丈夫かドラ もん？」

「誰がド えもんだ!？」

怒っているような声はどうやら押入れの中から言っているようだ。押入れの中に入っている?女性はたぶん頭を天井にぶつけたのだから、鼻を齧るような音が漏れていた。男性は笑みを零しながらテレビを点け再び押入れへと目を向け一言。

「今日の晩飯何がいい？」

「ラノベ」

「いや、それ食べ物じゃねーから」

「じゃあ何があるの？」

淡々と女性は男性に質問をした。男性はその質問に答えられるほどの材料は買ってきてはいなかった。正確には買えなかったと言えばよるしいのだろうか。

遅めに仕事が終わりで急いでスーパーに駆け込んだがそこには値引きシールが貼られている商品は無くしかたなくカップラーメンやインスタント系を籠に入れ購入した。

苦し紛れでもパスタ！と豪華な物を言っってしまったえば多分彼女はそれでいいと返ってくるに違いない。いや、絶対そという答えが返ってくる。

数年ほど一緒に生活していればお互いの性格や趣味など数え切れないほど浮かび上がってくるものだ。そして、勘違いしてほしくないのだが決して彼女は付き合っている仲ではない。確かに一緒に住んでいるが一言で説明するのは難しい話ではあるが強いて言うならば

彼女はゲシュタルト崩壊だから

いやいや、これはおかしい。日本語としても十分可笑しな文法であり友達に説明してもクエスチョンマークが返ってくるだけだろう。そもそも、ゲシュタルト崩壊なんて滅多に使われる言葉でもないし知っているほうが少ないぐらいだ！

ヘリング錯視やミュラー・リヤー錯視のほうはまだ聞いたことのある言葉であるだろう。

それにしても人間の脳とはすごいものだと関心できる、今この状況で忘れていた言葉があった。

彼女は引き籠もりで幼馴染な関係

これだ、幼馴染。

例えるとこれだ、学校帰りに女友達と楽しく話しているとたまたまそこに自分の好きな子が現れてしまい彼女さん？可愛いわねと言われ必死に違うと言う位きよどってしまったらしい。

我ながら何と変な性格しているのだろうか…

「ねえ、何があるの？」

空想の世界を勝手に描いていたらその一言でバラバラに碎け散った。慌ててキツチンにある買い物袋を確認するが大した物は出てこなく男性は肩で深い溜息が漏れた。しかたなく買い物袋の上のほうにある未開封のラノベを手に取り部屋へと戻る。

蛍光灯を消し押入れの襖を開けるとパソコンとラノベの山がありその隅っこのほうにパソコンから放出される光で照らされている黒いパジャマ姿の少女がいた。黒い髪は伸びきって手にはラノベを手にしこちらを見ていた。

「今日発売のラノベだ」

買い物袋から取り出したラノベを少女に渡す。それを凝視するよう
に少女は表紙を見続け少し大きな声を上げる。

「これは『このラノベがすごい』の大賞のラノベではないか！」

「ああ、大賞だけあって売り切れ寸前だったんだぜ…」

「今夜のオカズはこれにしよう」

「待て、その発言だと変な人が不自然な捕らえ方するぞ」

「それはどういう意味だ？それにお前も不自然な捕らえ方したんじやないのか？」

「それはあれだよ…あれ」

男性は言葉を濁しながら苦笑いをする。

お父さん、今年で21になる俺ですがこういう状況下でどう答えればいいのかわかりません。素直に言つと確実に蹴りかビンタが飛んでくることでしょう。だから俺は何も言わない事にします、これが最善の答えだと信じて

その場にはいない父親との空想上の相談は少女の蹴りで目を覚ました。

「いってえなおい！」

軽く吹き飛んだ男性は痛々しそうに手で腹を擦りながら起き上がった。

「ふん、お前が早く答えないからだぞ」

「だからそれはあれだあれ！」

「あれだとわからないだろうが、お前の脳のCPU腐っているのか？」

「俺の頭はパソコン部品じゃねーし正常だよ！腐ってもいないぞ！」

「だったら、早く答えてみる」

「そこまで言うんだったら答えてやるよ！今夜のオカズっていうのはな男性の…！」

数秒後、男性の頬にビンタをされたような模様が出来上がっていた。少女は顔を赤らめ男性を睨んでいる。

お父さん、黙秘は駄目だったよ、しかも最悪の想定蹴りとビンタ両方貰ってしまう結果になってしまって息子はすごく凹んでいます。

「変態！死ぬ！ロードローラーで踏み潰すぞ！」

「絶妙な所に ヨ ヨネタ入れてんじゃねーよ…！」

男性はゆっくりと押入れの襖を占め再び蛍光灯を点ける。深呼吸し少女との争いで得たストレスを落ち着かせようとまた深呼吸をする。

「なあ」

「なんだ変態」

「変態つてお前…まあいいか、これから大事な話をするぞ」

「大事な話？ラノベ的に言つとこの場面は告白か？」

「されてーのか？」

「嫌」

何の迷いも無く少女は率直に答えてきた。

「そつだろつな、今月中に仕事を辞めようと思つんだ」

「そつか…」

「ん、反論はないのか？」

「別に？人生とは人それぞれだ、お前が何しようとする私はお前の人生に釘を打たない」

「ありがとう」

ありがとう、そんな言葉は部屋に響き渡ったような気がした。

数分間の静寂が訪れた。押入れからページを捲る音は聞こえないということ静かに待っているんだろつか。男性のこのあとの人生をどうするかを。

「本屋を建てようと思つんだ」

その言葉に釣られ勢いよく押入れの襖が開いた。が、数秒後DVDの巻き戻したかのように勢いよく閉まった。

「目が…ゲシユタルト崩壊が起きる…」

言い忘れてた。

あいつはパソコンから出る光より強い光を直接目に当たることゲシユタルト崩壊という心理学に出てくる現象が起きる。実際どういうものなのかわからないがとても世界が歪んで見えるらしい。こんな風になったのは長年に渡る引き籠もりのせいだと思つ。

少女は今もなおもがいているのだろつ、押入れで何かにぶつかるよつな音が連発で聞こえてくる。

「大丈夫か？」

蛍光灯の電気を消し少女に話しかける。

「ああ、まだゲシュタルトだが大体大丈夫だが…本屋するのかわ？」

「ああ、ちなみにお前も働くんぞぞ」

「か弱い少女に働かせる気か？」

「蹴りやビンタしておいてその台詞はねーわ」

真夏の夜、静かに鳴く蝉を聞きながらまた静寂な世界になった。

半年前から決めていた計画であり必ず成功させたい計画でもある、なぜならこいつが引き籠もりになったのは俺に原因があるからだ。理由は話せば長くなるので省かせていただこうと思う。

押入れを見ながら男性は静かにありがとう、ときつと少女には聞こえない程度で呟いた。

あの大事な話をしてから半年という月日が流れていた。

今まで数年間繰り返してきた日常が終わりへと告げ、新たな日常へと塗り替えられる。大袈裟なことではないが胸から込み上げる高揚感……いや、店を建てただけで何も遣り遂げていないのだからこういう時はどんな言葉を空に向かって言えばいいのだろうか？

ラノベや色んな小説を読んできたが今この心境に合う言葉が見つからない、もつと勉強しておくべきだったんだなと少しだけ後悔した。3階建てのビルに立て掛けられた木でできた看板を見つめる。そこに書いてあるのは『SPIN』という単語。

これは一週間後から始まる本屋の名前、名づけ親は押入れに引き籠もりでゲシユタルト崩壊してしまう少女、宮代みやしろ 巴ともえが名付けた。意味は『紡ぐ』だそう。全く本屋とは関係のないネーミングセンスだった。俺からは何も言えなかった。

なぜなら、巴があんなに必死に考えてくれた名前なのだから、と言ったらフラグが立ってしまいそんな予感がするのでここは店長の指示ということにしておこう。

巴が店長で俺が副店長、なぜ発案した俺が副店長という形になってしまったかと言うと巴は全てのラノベの人気を抑えており発注する上で困らないからだ、だそう。そう押し付けられたのは半年前、大事な話をした30分後のことだ。

異論は認めないと怖い目で言われ渋々副店長をやることにしたが今ではあそこで反論しなくて正解だったと心の奥底からそう思った。ラノベの人気など気にしていなかった俺は何を発注しようかかなり悩んでいたと思うしそのせいで店の売り上げが伸びない原因ができるんじゃないかと不安でしょうがなかったからだ。

かといって、巴がその仕事で失敗しようとも俺は何も責めるつもりはなかった。単純に自分がへたれなだけか？もしかしたら、これも

フラグが立つ前兆なのか？

男性は顔を激しく左右に振り邪念を消す、もう一度ビルを眺めその場を後にした。

虎穴に入らずんば虎子を得ず、そう今の心境はこれだ。例え危険があつたとしてもその先に得られる物があると信じる。

今年22になる俺くさかへ久坂部 尊たけるは桜が舞う季節にはまだ早いがいずれ桜並木になる道を一步一步感触を確かめるように歩き出した。

E p i s o d e 1 : M Y b o o k i s a l l S P I N ! !

少しだけ時間を遡り本屋オープンまで残り一ヶ月に迫っていた。

午後8時という時間にも関わらず久坂部の部屋は真つ暗な世界が出来上がっていた。いや、正確に言うところ微妙に漏れる押入れの中からノートパソコンから出ている光だけが唯一の明かりだった。それでも部屋全体は明るくなるはずがなく久坂部は淡々と引越しの準備を進めていた。一番重労働のラノベをダンボールに積める作業は終わりあとは衣類などをダンボールに積めるだけだった。

部屋の片隅には20箱以上のダンボール、それは全部ラノベだと言うのだから驚きを隠せなかった久坂部はその重みで下の部屋に落下しないように何度もダンボールにお辞儀をした。実際床を歩く度に起きる振動でラノベ入りダンボール付近で嫌な音が毎回するのだ。それは慎重にしないと下の階の部屋や大家さんに激怒されてしまう。久坂部は今日する作業を終わらせ押入れに向かい話しかける。

「バー、こつち終わったから次はお前の作業するぞー」

「ようやく終わったか愚民よ、褒めて遣わすぞー」

押入れから返答があると押入れから部屋へと飛び移る。慌てて久坂部は宮代をキャッチしゆつくり下ろす。手に持っていたラノベを大事に持ち久坂部のほうに歩み寄ると同時に宮代の頭に軽いチョップが飛んできた。

「何が愚民だ、お前また影響されただろ、その前にゆつくり降りろよ！重すぎるラノベが床から陥没して下の階に落ちるだろうが！」

そう言うのと大事に抱き抱えていたラノベを奪い取り表紙に目をやるとそこに書かれていた題名は『愚民は王妃の私に Love Shot』と書かれていた。体の隅々から力が抜けるような気がした。

「そう怒るな愚民よ今の私は珍しく上機嫌だ、どうだ？面白そうならノベだろ？」

髪を靡かせ誇らしげに語りかける宮代だったが久坂部にとっては全く逆の感想。

どこがだよ？

題名を朗読したぐらいで俺の顔は真っ赤だよ！恥ずかしくてどうにかなりそうだよ！虎穴でもいいから穴があったらそこに隠れたいくらいだよ。

久坂部は手に持っていたラノベ（Love Shot）を窓から本を Love Shot してしまいそうな感情になりそうだったが何とか自我を取り戻すことに成功し宮代に返した。依然顔は熱暴走寸前だった。

テーブルに置かれていた新聞を広げ床に敷きそこに宮代が座り久坂部は後ろへと座った。手にはハサミと櫛、明かり要因としてノートパソコンを持ち櫛で髪を慣らし伸びきった黒髪を切り始める。本当なら美容院か床屋に連れ出して切ってもらいたいのだがゲシュタルト崩壊のせいで連れて行くことは不可能に近かったため久坂部が毎

度切るはめになってしまっている。

「どうだ久坂部よ、このパーフェクトなロリ体系とロングな黒髪を切る高揚感は素晴らしくここがラノベの世界だったら抱きついてしまいたいそうだろう？」

「別に普通だ、自分でロリ体系と言うが悲しくはならないのか？」

「ふん、自分がロリ体系だからと言って他人のスタイルを妬むなど見苦しい。それは自分に自信が無い証拠だろ？自分に無く相手に有る物にどうこう言うべきではないのだ」

「そっか、力説及び名言だな」

そうだろう？とまたしても誇らしげに返答する宮代だった。

数十分後、伸びきった髪は腰に着く位になっていた。久坂部は腰の所までいいんだよな？と確認するとそのほうがそるか？と返ってきた。軽く頭を叩き宮代を立たせ髪に付いている余計な髪を払い落とし新聞紙の上にある大量の髪を新聞紙と一緒にゴミ箱へ捨てる。

ついでにLoveShotも捨ててやるうかと思っただが宮代に激怒されそうなので止める事にした。

再びテーブルの上に置かれた分厚い封筒を宮代に渡した。

「履歴書だ、もうオープンまで時間ないから早く決めてくれ」

就職するにも一苦勞な時代になってしまったため求人雑誌掲載一日目から30人ほどの履歴書が集まっていた。日が経つにつれ徐々に履歴書を持つてくる人が少なくなったのだがそれでも50弱の履歴書が集まった。

宮代はノートパソコンの前に座り凄いスピードで履歴書を一枚一枚

膝の左右に置きながらわずか3分ほどで全ての履歴書を見終わっていた。

「詳しく見なくていいのか？」

「ん？ああ、私は資格や特技を見ないのだよ。たまに嘘を書いたりする輩もいるからな」

久坂部は鼻で返事をし宮代の膝右側に置かれた数枚の履歴書を渡してきた。

「これは？」

「合格者だ。主に入れる時間帯と週何回入れるかを重点的に見たがそれは表の理由だ」

「裏は？」

「容姿」

この発言で某携帯ショップのことを思い出したのは俺だけではないはずだ。

「ごめん、巴の考えがわからん」

「能無しでCPUが腐っている久坂部に簡単に説明しよう、ただの本屋ならもつと合格者も増えていただろう。しかし、私達がするのは何だ？カフェと本屋が混同した店だろ？だったら容姿も視野に入れなくてどうする。カフェで美少年がコーヒーを作り持っていくと腐女子が大喜びだぞ？」

「…」

無駄に威圧感のある説明は何から文句を言えばいいのかわからなくなつた。

まずは『能無しでCPUが腐っている』の所から怒ればいいのか？それとも『美少年がコーヒーを作り持っていくと腐女子が喜ぶ』という腐女子限定の所から怒ればいいのか？頭を抱えてもどちらを先に怒るのかなり悩む内容だ。

しかし深く悩むと巴の考えていることに一理あるとさえ思えてくる。カフェ・イクメンの概念というより偏見だけはどうしても覆せないものがそこにある。それはあくまで腐女子視点でありもし男性視点だったらどうだろうか。

こういう時に浮かび上がる場所と言えばメイドカフェだとしよう。好みの女性がたくさんいるというまるでそこは天国かのような光景が広がっているに違いない。あくまで妄想であり実際はどうかかわらないが可愛い女性に「お兄ちゃん、一緒にオムライス食べよう」なんて言われた時にはゲシュタルト崩壊するなこれ！

「鼻伸ばしてきもい、死ね」

その言葉で我に戻ると二つの異変に気づいた。

まず足の脛に激痛が走っている事、これはあれだ宮代が踵で俺の脛を蹴つたのだらう。かなり痛い、できれば飛びながらこの痛みを強調したいが部屋の隅にあるダンボールの山のせいでそれはできなかつた。

二つ目、先ほど妄想で出てきた謎の妹キャラだ。オムライスを一緒に食べようまではまだ許せる範囲だがなぜそこに妹キャラが出てきたのか悩まされるがもしかして俺は妹萌えの人種なのか？本当は口り体系の巴萌えだったのか！？

それもまた頭を抱え飛びながら邪念を消したかったがやはり墨にあるダンボールがそれを邪魔をする。何とも言えないこの感情は消せることはできず宮代の考えに同意するしかなかった。

「わかった、巴の考えで賛成だ…」

「わかればよろしい」

結局、合格者は5名に決まった。

フリーター一人、大学生三人、人妻一人だったが明らかに人手不足が目に見えている。この事について宮代も顎を手で押さえ悩んでいるようだった。

「ふむ、ニーソが足りない…」

「ニーソじゃなくて人が足りねーんだよ！」

悩む原因が斜め上の方向だったため久坂部は思わず大きな声で反論してしまった。

「何を言うか、ニーソは偉大だぞ？」

「偉大とかそういう問題じゃないぞ！俺でもわかるぐらい単純で人が足りてないんだよ！」

「先ほど言っただろ？容姿も含めて合格者を出すと、さっき見た履歴書の中に誰一人ニーソを穿いてくれそうな人はいなかった。カフェとはいえ腐女子限定で喜ばせるわけにはいけないんだ男性も喜ばせないといけないだろ？」

「それは同意だが二一ソ以前の問題じゃないのか？人がいないと仕事もできない」

考えが通じたのか宮代はそう言われもう一度険しい表情で履歴書に目を通した。

初めて履歴書に目を通した時間より2、3倍の時間を掛け合格者は5名から8名になった。これならギリギリ足りるぐらいだろう。

「ここがラノベの世界じゃなくてよかったな久坂部」

「どういう意味？」

履歴書を読み返したのにも関わらずその険しい表情を崩していなかった。

「登場人物が多いと読者に飽きられるし色々設定がめんどくさいんだぞ。最悪ゴミ箱行きだ」

俺は巴と数年一緒に暮らしてきた。それは楽しい毎日で巴がここまでするまで真剣に考えてくれるなんてことは一度もなかった。だが、その真剣な考えが俺には到底理解できないものであり彼女は少しだけ謎めいた存在になりかけた。

巴の謎のラノベ論により脱線しかけ本題に戻すのに1時間ほど掛かった。

ニートだのパンストだの色んな脱線要素たつぷりの会話は久坂部までもが熱く参加してしまうほどヒートアップしてしまった。時間を忘れ気づいた時にはすでに夜中2時を回っていた。

「巴の言いたいことはわかった…、とりあえず時間もあれだから今日はお開きにするが合格者はさっき俺に渡した履歴書の人でいいんだな？」

「そうだ、昼頃にでも連絡してあげるといいぞ。マニュアルを渡さないといけないのもあるが実際練習しないとイケないからな」

久坂部は頷き散らばった履歴書を集め合格者の履歴書だけを別の封筒へ入れ宮代はノートパソコンを片手に着替えのパジャマとバスタオルを持ち風呂場へと向かうとしている時に宮代は振り向きながら注意してきた。

「覗いたら殺す」

「お前の何処に魅力があるんだ？」

脇腹に重い何かが飛んできた。

あまりの的確な人間の弱点を突く蹴りは久坂部にとって声にならないう痛みでその場に倒れこみもがき始める。鼻で笑う宮代を涙目になった目で追ったが途中でその気力さえも脇腹の激痛で無くし目を瞑る事で精一杯な久坂部であった。

徐々に痛みは引き始め就寝の準備に取り掛かる。準備といってもただ布団を敷くだけのことだが脇腹の事を考えると相当な体力が消耗されていた。

「マジいてーな…」

月の光を利用しシャツを上げ脇腹を確認するとそこには真っ赤になった皮膚が出来上がっていることに気づいた。道理で痛いはずだ。久坂部は布団にゆっくり脇腹を気遣いながら横になり遠くでシャワーの音と何の曲かわからない鼻歌も混じって聞こえてきた。上機嫌なのだろうか、宮代が鼻歌をすること自体珍しい事である。

そんな鼻歌を聴きながらまどろみしかけようとした時にシャワーから上がった宮代は押入れへと入ろうとする時にシャンプーの残り香が久坂部の鼻に匂ってきた。

「おい、『ああ…この匂いいいなあ〜』とか思ってたらもう一度脇腹蹴るぞ」

「思ってたねーし勝手に人の脳内入ってくるなよ」

実際あまりに良い匂いだったためそう思いそうになる寸前な久坂部であった。

少し怒ったような宮代は久坂部を睨みながら押入れの中へと姿を消していった。シャンプーの残り香だけが睡魔が誘うような感じがした。だが、SPINの事を考えては眠れなくなり期待と不安だけが睡魔を邪魔をする。

メビウスの輪のように表の悩みを解決し裏の悩みも解決してもまた表の悩みで悩んでしまうような感覚。要は同じ悩みを解決できない弱者なのだ。

半年前のあの日に巴に話したSPINの件はどうしても成功させな

ければいけないと思っていた。それがどれだけ苦勞をしても頑張らなきゃって思ってきたのにオープンが近づくとつれ頑張るという気持ちより不安のほうが無断重くなってきていた。もし失敗してしまつたらもう俺の横には巴がない、そんな気がした。

押入れのほうを向くと瞼が熱くなってきていることに気づき慌てて手で目を擦る。久坂部は苦笑いしながら心の中で呟いた。

「（大人が泣くななんてみつともないよな普通…）」

布団を顔まで被り覆い隠した。

見たくない現実を背ける様に深い暗闇の世界へ向かう。しかし、その暗闇の世界は数秒で壊されることになった。

「久坂部起きてるか？」

突如、幻聴かと思つた宮代の声が聞こえた。

久坂部は布団から顔を出すと襖が少しだけ空いた隙間から宮代の顔が少しだけ出ていた。

「どうした？」

「いや、別に大したことではないのだがな…」

言葉を濁しながら宮代は苦笑いをしていた。

「私の事と私の母親の事…その、今も悩んでいるのか？」

その言葉でまた瞼が少しだけ熱くなった。

今この瞬間に聞かれたくない言葉が久坂部を襲う。宮代もまたいつ

もの声ではなく少しだけ泣き声になっているような気がした。だからこそ、ここは正直な気持ちで返せばいいのだろうか？もしくは嘘をついてまで巴に不安を与えないようにするべきなのか？

「悩んでいないなんて言ったら嘘になる」

そんな考えよりも口が先走りし正直な気持ちを宮代に伝えてしまった。

「そう…だよな」

先ほどの声よりまた一段とトーンが下がった声が漏れる。

「でも」

「？」

「前俺にこう言ったよな？人生とは人それぞれ、お前の人生に釘は打たないと…だから、俺もお前の人生に釘を打たない。母親はどう思っているか知らないけど巴は巴の人生を歩めばいい、それじゃ駄目か？」

微かに聞こえた鼻で笑う音。

「ラノベっぽくまとめたな久坂部」

「うるせ、明日…いや今日は早いんだから寝る」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ」

襖が閉まりそれを確認すると久坂部も布団へと潜り込む。

巴の母親：今一番の悩みの種はそれなんだと久坂部は思った。だから巴も聞いてきたんだろ、お互い共通した悩みなのだから。

SPINの事よりも重く行き場の無い不安はずっと胸の奥で蠢き続ける。今解決できる問題ではなくその時が来たら覚悟を決めよう、そう久坂部は思い眠りの世界へと旅立った。

久坂部が起床したのは12時20分前。

合格者に電話をするだけだったため慌てる様子もなくキッチンに向かい朝飯もとい昼飯の準備に取り掛かる。冷蔵庫の中に目ぼしい物があるかチェックをするがどれもオカズになりそうな食材は無かった。

溜息を漏らしながらご飯、塩コショウ、卵を取り出し適当な材料で炒飯を作り始める。こういう時に作る炒飯は便利だと久坂部は思う。なぜなら材料さえ間違わなければ不味い炒飯は出来上がらないのだから、これぞ節約という名の安物料理である。

二つの皿に炒飯を移し押入れに蹴りを一発入れると中から寝ぼけた声が聞こえてくる。

「ん…もう朝か？」

「昼だ、いつまで寝てるんだよ」

お前に言われたくない、そんな事を言われるほど今の宮代の脳は回

転していなかった。皿が通るギリギリまで襖を開け宮代に炒飯を渡し自分もテーブルの上に炒飯を置き食べ始める。塩コショウが足りなかったのか少しだけ味が薄いような気がした。

「バー、食べ終わったか？」

「ちょっと待て、急いで食べる」

「慌てなくていいんだが…」

数十秒後、襖から皿と小刻みに震える手が現れた。

久坂部はそれを受け取り水に漬けてテーブルに置いてある履歴書の入った封筒を一枚取り出し携帯で記述されている電話番号へ掛け今週の三日後土曜にSPINへ入るよう指示を飛ばす。初めて話す相手でも多少堅苦しい会話になってしまったが30分ぐらいで合格者全てに連絡がついた。

「ふー、やっと終わった…」

安堵の溜息が漏れる中、引越し業者への連絡もすることにした。

「今日の夜にでも店で暮らす準備しとくか？」

「そうだな、今から私も引越しの準備するか」

「お前、何か持っていく物あるのか？」

ぱっと浮かぶ範囲内ではラノベぐらいしか思い浮かべられなかった。

「ラノベだ」

自信満々に言う宮代。

苦笑いをしながらさつき水に漬けていた皿を洗い水を拭き取りダンボールの中へと皿を入れる。辺りを見渡せば何も無い部屋、何処か寂しくなりそうな雰囲気を出していた。

「もうすぐなんだな」

「何がだ？」

「SPIN」

「今更何を言っているんだお前は？」

「別に逃げ出したいとかじゃないんだ。ただ、半年前に決まったことなのにもう目の前に来ているんだなーって」

「言われてみればそうだな、昔のことのように懐かしささえ感じてしまう半年前だったな」

「成功…するといいな」

「店長が私だぞ？失敗なんてするものか」

二人は笑いながら思い出話に花を咲かせ盛り上がるとあっという間に夜を迎えた。

「それじゃ、行くか」

久坂部は少し大きいバッグを片手に押入れの中で準備をしている宮

代へ声を掛ける。少し待てと小さな声が聞こえ玄関まで歩き出す久坂部。

宮代の言った通り、数分で出てきたが背中に背負っている可愛い熊のリュックが内側からのラノベの圧力だろうか、顔が変形していた。

「大丈夫…か？」

「ラノベ愛読者の私にとってはこんなの軽いものだ」

宮代の言葉と顔は言っている事とかなり食い違っていた。思わず笑ってしまいそうになるぐらい宮代の顔は必死そのもの。

「ほら貸せよ」

軽く持ち上げるはずだった熊リュックは重力に従うように真下へ落ち重い音になった。

「ば、馬鹿！何やっているんだ死にたいのか！？」

「なんだよこの重さ！ドラ エで言うとMAXレベル完全にオーバーフローしてんぞ！」

体感にして20kgほどだが実際には20kg以上あると久坂部は見た。片手で持ち上がるほど筋力が無かった久坂部は肩に担ぐことにしたがそれでもラノベの重さで肩に掛かる負担はかなりのものだった。

「全く…ラノベを愛するものが乱暴に扱ってはいけないぞ」

「お前が言っな、あとこれ」

宮代に手渡したのは黒いサングラス。

夜とはいえ外灯や店の光など宮代に脅威があるものから守る必須アイテム。それを掛けた宮代は何とも言えないダサくこれもまた笑ってしまいそんな顔だった。

「むう、これでは前が見えないぞ」

「光に当たるよりマシだろ？」

そう言うと玄関を開け外へ出る。まだ春前で多少冷たい風が吹いていた。

久坂部は軽いほうのバッグを宮代に預け左手を差し出す。

「ほれ、手出せよ。前見えないんだろ」

そつと手を差し出した宮代の手は少しだけ冷たかった。

「これではまるでロリ娘を誘拐した変態だな」

「笑えない冗談だな」

月は街全体を照らし、外灯は街の細かいところを照らし続ける。

それに触れないように二人は他愛も無い話をするのではなく黙々と歩き続ける。久坂部は前を向き宮代は月を見上げる。

数年ぶりの外の景色は新鮮そのものなんだろうか。辺りを見渡し何処か落ち着いていないそんな素振りを見せる。それを見た久坂部は少しだけ微笑みながら冷たかった手を微かに力を入れる。

やがて、SPINと書いてある看板が掲げられたビルへと着いた。重かった熊リュックをゆっくり置き宮代をSPINの前へと立たせ

ポケットに入っていた携帯を取り出す。

「一枚写真撮るぞ」

そう言うと宮代は少しだけ顔を赤くしながら右手をピースし微笑んだ。

それを逃さないように撮影ボタンを押す。

「あ」

大変な事に気づいた時にはすでに遅かった。

携帯写真の設定でフラッシュ効果を消すのをすっかり忘れていた結果携帯から強い光が放出される。案の定、宮代は両手で目を隠し苦しんでいた。

「わざとだな!!今のはわざと以外ありえないぞ!!」

「す、すまん…フラッシュ効果消すの忘れてた」

寝転がるように苦しむ姿を見て腹の底から笑いが漏れた。

宮代は怒りながら久坂部の腹にあまり痛くない拳をぶつける。何発も何発も、それでも久坂部はずっと笑っていた。

SPINの前で笑い声と怒った声が交じり合う。

もし、この周りに通行人がいるのなら幸せそうな光景に映っているのかな？

本好きが集まり暖かい店を紡ぐ

それがSPINの本当の意味。そして、この物語もまた小さな糸が紡ぎだす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4215ba/>

押入れ少女はラノベの世界に憧れている(仮)

2012年1月14日10時51分発行